

北海道石狩湾産プランクトン調査 II 昭和50年夏季“沿岸水域”における植物プランクトン量と植食性プランクトン量との関係

小島守之・渡辺智視

昭和50年夏季の石狩湾沿岸水域においては、植物プランクトン量（表面クロロフィルa量）と植食性プランクトン量（0~20m水柱内現存量）との間には有意性の高い相関関係は認められなかった。植食性プランクトンの代謝率に対し外囲の植物プランクトン濃度と外囲温度との2要因が拮抗して作用した結果と考えられる。同年夏季の石狩湾全域表面の平均クロロフィルa量は1.56mg chl. a/m<sup>3</sup>であった。この値は夏季の親潮表面で知られている値に近い比較的高い値であるが、この値は夏季石狩湾沿岸水域表面の平均的クロロフィルa量と認められる。

A92 北水試報 20 1-12 1978

ホタテガイの生殖に関する研究 第3報 雌雄同体生殖巣の観察

丸 邦義

オホーツク海から得たホタテガイ成員の雌雄同体生殖巣につて、肉眼的および顕微鏡的観察を行った。その結果、外観は雌雄の生殖組織が斑紋状に混在していた。また、組織切片では雌性と雄性の生殖細胞が別々の小囊中、ないしは同一の小囊中にみられ、これら小囊によって生殖巣は複雑に構成されていた。小囊中には成熟精子と成熟卵が観察され、それらの一部が放出された形跡がみられたことから、本現象は機能的な雌雄同体現象とみなされた。

A94 北水試報 20 27-33 1978

ホタテガイの生殖に関する研究 第2報 1年貝の生殖巣の発達

丸 邦義

サロマ湖産養殖1年貝と網走沖天然の1年貝について生殖巣の発達を組織学的に観察した。生殖細胞の成熟過程区分は前報に従って行った結果、雄性生殖細胞には5期、雌性生殖細胞には4期がみられた。これに基づいて生殖巣の発達過程を5期に大別できた。5月は総て雄で、ほとんどの個体では成熟精子を有するが、これらは放出されることなく6月から退化、吸収され、8月までは性別が不明になる。9月以降は雌雄に分化し、この時にほぼ1:1の比率になるものと推察された。したがって、本種が性成熟に達するには満2年を要すると考えられた。

A93 北水試報 20 13-26 1978